

堅パン

泉鏡花作

一

「入らつしやい！」

權の野郎が其聲といつたらない、腸を絞り出して打ツつけるやうな音であるから、客を呼ぶやうな容易なことではない、乗車を勧めるといふやうな手輕なものではない。

まるで其九段の上に群つてる人を、坂下の總井戸の處に居て、引摺んで胸倉を取つて、ずる／＼／＼馬車の中へ引摺込まうとする聲だ。恐しい聲だ。

だもんだから、華奢な婦人や、優しい男の客はないので、ギツシリ十二人詰込んだのは、皆遅しい野郎と、肥満女ばツかり。

札切の權の野郎は、あんぺら帽子に古外套、松の木根ツ子のやうに節くれたつた、繼はぎの長靴で、肩から革靴をぶらさげてる。

此革靴がまた唯革靴とばかりいつたつて分るんぢ

やない。

着て居る洋服は切た。切てさへ霜に凍てゝ、雨に濡れて、からッ風で乾き切ツて、砂まぶしになつて、天日で固まつて、權のアノ丈夫な手足に筋鐵が入つて居なかつた分には、得て屈曲しないほど堅くなつてるのに、況して革だ。革鞆はカンノゝになつて鐵のやうで赤錆に錆びてるんだ。而して金具だけ光つて居る。權の天窓から爪先まで砂に塗れて、ふすぼり切つて居るもんだから、殊に目に立つて光つて居る。金具とモ一ツ光るのは權の眼だ。

この眼でギロリと馬車中ニしたが、次手だ、モ一人二人推込めと、少し發車を見合して、件の聲で、

「入らつしやい！」と叫んだ。

「先生、慾張るな、出せ、出せ。」

何、これしきりの聲に恐れるやうな客種ぢやあない、二三人で同音でいつた。

「直ぐ出ます。今だ。」

といつて、權は催促を避けて前へ廻つた。

「權ごんやい、廢よせてツたらやい。見みツとむねえ、往わう來らいだ。」

と高い處たかでものをいふ、天窓あたまは勸工場くわんこうばの旗竿はたざをの尖さきと同一位おんなじくらゐな處ところにある。坂下兩側さかしたりやうがはの家いへを踏跨ふみまたいで、宙ちゆうに體からだを据すゑた、逆八丈字さかはちもんじに大おほきな靴くつの裏うらを翻ひるがへして、細卷ほそまきのシガレットを吹ふかして居ゐる、澄すましたもので、これは、御存ごぞんじでもあらうが、馭者ぎよしゃの先生せんせい。

權ごんは眼めを光ひからして上うへを向むいた。

「食くふんぢやねえ、嚙潰かみつぶして吐はき出すんだい。」
と肩かたを聳そびやかしていった。

左様さやうだ。

わんぐりと口くちをあけて、脇腹わきばらから垂たれ下さがつてる衣かく兜しの中なかから、神田一ツ橋名代かんだひとばしなだいの堅かたパンを出だして、權ごんは客きやくを呼よぶ隙すきにやカツチリ／＼やつてるが、さうだ、食たべるんぢやあない。

前齒まへばで留とめて、右みぎの手てで折をッペしよッて、奥齒おくばで嚙碎かみくだいちやあ吐出はきだすんだい。さうだ、靴くつの尖さきへぶツかけて、一片踏躡ひときれふみにじつちやあ、別べつのを吐出はきだしてまた踏ふんでるんだ。

「なほ不可や、止せ、狂氣染みてる！」

と馭者は巻煙草の飲さしを打つちやつて、鞭を執りながら俯向いて眉を顰めた。

ちやうど此時思出したやうに、

「入らつしやい！」

と叫んだのが、首尾よく客を二人引摺り込んで、馬車の中へ叩き入れた。此聲は立派に權をして成功せしめたので。

「勝手にしやあがれ。」

と權は投出したやうにいひすて、後へまはつた。

「畜生ぶり／＼、して居らい。どツ。」

ひとりと捌くと、二手綱で馬が動き出して、馬車はゆるやかに一つまはつた。ぐいと出る。

ちやうど晩方のことだつた。

日ひが暮くれる、夜よるになつて安泊やすとまりへ歸かへつて、飯めしを喰くつて、一風ひとふう呂浴ろあびながら其處そこいら等らぶら／＼して、歸かへると、皆みんな寝ねて居ゐる、起おきてるのは三疊さんていにお麗れいさんたつた一人ひとりだ。

奉公人ほうこうにんなしの一人働ひとりばたらきで、朝あさから晩ばんまで苦勞くらうをし通どほして、やう／＼水仕事みづしごとをしまつてから、薄暗うすくらい行あん燈とうの影かげで針仕事はりしごとをぼつ／＼して居ゐる。束髪たばねがみの銀ぎんかんざしだ。半襟はんえりのかゝつた頸えりの白しろい、手てのきれいなのに、一昨日をとつひの晩ばんまでは、每晚まいばん好すきな堅かたパンを二ツづゝ買かつて、戻もどつて、ソツとやつて、莞爾にっこり笑わらつて戴いたくのを見みて、飛とんで歸かへつて、毛布ケットに潜もぐつて、丸まるくなつて寝ねたつけが、昨夜ゆうべ嫁入よめいりをしちまつた。ー プツと堅かたパンを砕くだいて居ゐたのを吐はき出だした。權ごんの強つよい齒はだつても、このパンの堅かたいのを砕くだくのだから嚙かみ占しめたはずみで、吐はき出したあとに、キリ／＼と齒はが鳴なつてゐる。

一ツ吐ひと出はきしてからまた喰くひかゝらうとするトタンに俎橋まないたはしへ乗のり懸かけたから、權ごんは飛とんで下おりた。そし

て橋向うまで呐喊した。

これで第一の難處は済んだので、これから大難處にかゝらうとする、がた馬車はこれからだ。

一體九段から萬世橋まで行く間に、この馬車に取つて三處の切所、蓋し難場がある。

第一は今いつた俎橋で、俎橋の交番を過ぎることだ。

これは定員十二名の他に二三人も詰込んで通るのを、悪くすると査官に見つかるからで。しかし何、赤馬車に乗らうといふ身で、硝子越に往來を瞰下すでもあるまい、生意氣に天窓を持上げようとするから間違つてると、こつそり乗の分は定員の列した膝の上へ面をおつゝけさして置けばそれで済む。

第三は港口で破船の格、これはまた危いけれど、ほんの一呼吸で、そこは馴れてるから案じるほどのことはないので、別でもない、淡路町から萬世橋へ出ようとして、馬車が半月形にぐるりと廻る處の、直徑八尺、幅六尺ばかりの地の窪溜、些少な難だ。

然るに其第二の難處、これが容易でないのである。即ち一ツ橋外一圓の惡臭、大惡臭といつても宜い、アノまた匂といつたらない。塵芥捨場が庫のやうに並んで居る處へ、秣の臭氣と、馬糞牛糞、それ溝の匂、恐らく東京府の惡臭を一處へ吹寄せた位のもので、風船に乗つてたら知らず、空中、三十立方尺の間といふものは、唯芬々として一種異様の惡臭が充満てる無上の難場だ、雨上りの日あたりや、むし／＼と蒸す時や、陽炎の立つ時などゝいつたら、言語道斷、人も、馬もあれでもつて打つ倒す。

こゝへ乗りかけたとなると、唯盲打の捨鞭で、馬、空を駈けるにあらざるよりは、他にこれを防ぐの方法がない。

で、大きいへば島國の一處に曲線を描いて龍巻のやうに砂煙が立つといつて構やしなない。

まつしぐらに駈けて來た。

一團の紅塵のかぶさつて、唯駈者の鳥打帽と、車の形とが朦朧として見ゆるばかり、恰も煙に乗つて風に吹飛ばされながら、ぐる／＼、ぐる／＼、わに廻つて飛ぶやうで、一砂あびる、とまつ黒になつて、

隠れつちまつて、遠くの河岸へ馬車の横腹が顯れる。
神田橋から二三町手前の處で、バツタリ留つた。馬
が動かなくなつたんだ。

いま一呼吸乗り抜けると、早く既に惡臭界を脱し
て、神田橋で一寸休んで、それからあとは錦町の二
等道路を眞直に駈けるので、此時は棄鞭で遁げを打
つのでない。坦砥の如き大路の眞中を宙に飛んで走
るのだから馭者の先生得意の時だ。此得意でもつて、
やゝ惡臭ぬけの困難を取返すんだのに、こゝで馬に
留られては叶はない。しかも塵芥は立つ、西日はさ
す、むせかへるやうな酷い臭氣で、呼吸もつけない。

砂埃すなほこりは浴あびて居ゐる、ほか／＼した惡暖わるあつたかいお天氣てんきで、西日にしびが射さすので、氣味きみの惡わるい汗あせは出でる、目めも、鼻はなも、唇くちびるも唯ただじやり／＼して咽むせるやうな處ところへ、其惡臭そのにほひを吸すつて惱なやむんだから、お麗れいさんに嫁入よめいりをされて、失しつ望ぼうして、昨夜ゆうべツから一ひと眼めも寝ねないで、懊惱おうなうを極きはめて居ゐる權ごんの天窓あたまは苦痛くつうに堪たへない。氣きが違ちがひさうだ。

「何どうしたんだ、何どうしたんだ、何どうしたんだ。」「と足踏あしふみをした。

かう詰なじられるまでもない、馭者ぎよしゃも一秒セコン下と雖いえどもこゝに停滯ていたいするに得堪えたへぬのだから、前刻まつきにから百方術ほつじゆつを講かうじて居ゐるけれども、疲つかれ切きつた馬うまは到底たうていこゝまで來きた後あとのこの重量おもみを曳ひくに堪たへないので、二頭にとうとも身震みふるひをして、カラ足あしを踏ふむばかりだ、埒わちはない。

「小こじれつてえ！　コン畜生うけこへけつ。」「權ごんは突進とつしんして前まへへ出でて、いきなり縦横たてよこに鞍あかぎれの刻きざまれてる拳こぶしを振こつて、馬うまの横面よこめんを一ひとツ打ぶつた。

「どツ畜生うけこへけつ。」「と息いきまいた。氣きばツかりあせつてるから、續ついで様に

モ一ツはりのめしかゝつたが、勢ではずみをくツて、鼻面を掠めた拳が空を打つて、權はツンのめらうとして踏こたへたが、一人で腹を立つて、眞赤になつて呼吸ついでる。

「ヨイシヨ。」と客の一人がいつた。

皆で哄と笑つた。

馭者臺から悠々と瞰下して、

「駄目だ。權、そんなことで動くもんか、それ。」

といつて、右の手を高く空に翳して、左で手綱を引詰めると、同時に鞭はピューと風を切つて、蒼空高き處に圓を描いたが、しつかり馬の急所にあたつた。

摺り剥けてる赤ツちやけた背骨から太腹へたらノと汗を流して、鬚を震ふと見ると、前足をもがいて跳ね上つたが、車は前へ出ないで横に震動した。凄まじい揺れ方だ。

但しこんなことで驚くやうな据らない膽では、到底此馬車に乗れはしないんだから、十四員の乗客自若として、次から次へゴツノと天窓同士打つ附け

た。

また先刻の聲で、

「ヨイシヨ。」

「頼むぜ。」とか何とかい、ふ、澄したものだ。

「それ不可えや、この手で行かないけりや、とても不可えんだ。」

馭者は斷念めたものらしい。

「ウ又」

立つて睨みつけた權は、兩手を揃へて、躍りかゝつて、どんと打つた。矢聲を揚げて、

「何だツ。」

びくとも動かない。

「ヨイシヨ。」

と此時また噓した。乗合がまた哄然と大笑する。

馭者も微笑を洩して、

「權、コイツアあきらめもんだぜ。」

「馬鹿ア、何だつて、コン畜生。」

瞳を据ゑてぞつと見る、太い眉に猿眼がきらめいた。唇を噛んで、黒い顔の、眼の下に朱を灌いで、また握拳でじりゝと寄る。

「止せ、止せ、腕うでツ節ぶしが折くだけたツて、さしあたり
こいつが動うごくかい。度胸どきょうを据すゑる。ヨ、權ごん、この臭にお
氣ひだツて意地いぢになつて此方こつちで吸すい込んでやりや忘れわすれツ
ちまはあ。お互たがひにまはり合せよ、しかし堪たまつたもん
むやあねえ、が、何どうするもんだ。」

と高い處たかところで大欠伸おほあくびをして、力ちから抜けがしてゐるらしい。

「左様さやうさ。こりや、あせつたつて仕様しかたがござんす
まい。このまんまで一日いちにちとうりう逗留とらひをしようぢやありませんか。
立たちン坊ぼうに使つかひをさして晩飯ばんめしでも取寄とりよせませう。」
と恐おそしく暢氣のんきな客人きやくじんがある。

また、

「ヨイシヨ。」といつた、高笑たかわらひの聲こゑがする。トタ
ンに權ごんは胸むねを打うつて考かんがへつた。立たつたまゝ土足どそくを
あげて、二ツ三ツ馬うまの足あしを蹴け飛ばした。が、一向効いっかうき
きめが無いなので、左ひだりの足あしの長靴ながぐつを脱ぬぎつ放はなして、アノ
化石くわせきしたやうな堅かたいのを振冠ふりかぶつて、身みを以もつてまつく
るに馬うまのどてツばらへ打ぶつかつた。續様つづさまに唯たゞもう
盲打らうちに打ぶちのめすのだ、靴くつが躍をどると、外套がいたうの裾すそが風かせ
にあふつて、飛とびつくので砂すなを蹴け立たつて、赤黒あかくろい一團いちだん
の煙けむりの中なかに惡鬼羅刹あくきらせつが狂くるふやうだ、權ごんの眼めは血走ちばしつ

てる。

そしてどうと打つかる毎に、泡を吐いて、首を垂れて、あへぎ切ツてる馬がびく／＼する。

「コン畜生！コン畜生、コン畜生、すべつため。」
と砂煙の中で叫んだ。凄まじい聲だ。

「権、おい、馬はお麗さんぢやあねえツてことよ。
おい、権、野郎、何うしやがった。」

と馭者臺から眞黒な砂の中へ憂慮つて聲を懸けた、
其が聞えたらしい。

「畜生だい、コン畜生だい！」

四

モ一度繰返していふが、權の堅パンは食べるんぢやあない。前齒で銜へて、右の手で折ッペしよツて、奥齒で嚙碎いちやあ吐出すんだ。吐出したあとで齒を鳴すんだ。

これはお麗さんが嫁入をしたからだ。權が嚙碎いちやあ吐出して、靴の尖で蹂躪る堅パンは、蟲の故か - - あんなに弱々しい、霞を呑んでも咽喉に詰りさうな、花の露を吸つても咽せ入りさうな、華奢なお麗さんが - - 大の好物で、嫁入をする前の晩まで、毎晩々々權の野郎が買つてつちやあ、行燈の影で一人白い手で、うつむいてしよんぼりして、針仕事をしてる處へ貢いぢやあ、恐しく嬉しからせたまのだった。

可哀さうに、權は何うかしたのに違ひない。河岸で馬が留つた時長靴でぶんなぐつた様子なんざ、全くアノ野郎無茶苦茶になつたんだ、亂暴になつたんだ、酷くなつたんだ、何うでもしろといふ氣なんだ。それでもまだ馬は動き得はしなかつたが、最後の

大打撃ぢやあ何うしたもんか、跳ね上つて駈け出した。唯もうはずんだ車に突飛ばされて、馬は萬世橋まで飛んだので、馭者が高い處で茫乎して手をひるげたのは此時ばかり。何でも大の字なりになつて空を駈けたやうに思ふ、眼が眩んだと然ういつた。

權は片一方の靴をなくして居た。そして兩掌で角の尖つた石ころを砕けよと搦つて居た。さうだ、あのぶんなぐりはこれでしたのである。石は血に染んで居た。馬もさうだが、水牛の皮のやうに厚くつて堅固て居る權の掌も打ツきれて居た、野蠻極まるわけだ。

其癖萬世橋が暗くなつて、電燈が蒼い光を放つて、ちら／＼とあかりがつき、冷い夜風が吹いて、空が拭つたやうに晴れた時、降るやうな星の下で、權は少し氣が静まると、馬の鬣へニりついて、頬ツペたをおツつけた。

「堪忍しろよ、悪かつた。」

といつてはら／＼と落涙したものの。それだから權は可哀相だと、皆が然う思つてるんだ。

で、少し^{すこ}落着^{おちつ}いたら止めれば可^いのに、寄^よつてたかつて何^{なん}てツて聞^きかしても、堅^{かた}パンを噛^か砕^{くだ}いちやあ吐^はき出すことをよさうとしない、矢張^{やっばり}權^{ごん}は何^どうかし
たんだ。

と皆^{みんな}が憂^{きづ}か^つて居^ゐるうちに、ふいと黦^な間^かの内^{うち}に見^みえなくなつて、何處^{どこ}かへ姿^{すがた}をかくしツちまつた。行^{ゆく}方が知^しれない。確^{たしか}に權^{ごん}は何^どうかして居^ゐる。

權^{ごん}が居^ゐなくなつて三月^{みつき}ばかり經^たつと、淺草^{あさくさ}の見世^{みせ}物^{もの}小屋^{こや}へ看^{かん}板^{ばん}が出^でた。

唯^{たゞ}見^みる、手^てを拱^{こまめ}いて胡坐^{あぐら}を組^くんだ夜叉^{やしや}の如^{ごと}き顔^{かほ}のものが、天窓^{あたま}の上^{うへ}へ七輪^{しちりん}をのツけて石炭^{せきたん}を焼^やいて鐵^{てつ}鍋^{なべ}をかけて油^{あぶら}を煮^にて居^ゐる。黒煙^{くろけむり}が渦^{うず}を卷^まいて立^たつ中^{なか}から、ちよろ／＼と嘗^なめまはす毒龍^{どくりう}の赤^{あか}い舌^{した}が見^みえて、沸騰^{ふいとう}した油^{あぶら}のニ^{しぶき}が粉微塵^{こなみぢん}になつて、眞白^{まつしろ}なのに艶^{つや}を帯^おびて、透通^{すきとほ}るやうになつて、舞臺^{ぶたい}一面^{いちめん}に降^おり灌^{そく}いで居^ゐる處^{ところ}であつた。印度人^{いんどじん}の奇藝^{きげい}である、手品^{てしな}ではない、西洋^{せいよう}輕業^{かるわざ}でも何^{なん}でもない。

渠等^{かれら}一種^{いっしゆ}の迷信^{めいしん}から、文覺^{もんがく}の荒行^{あらかやう}と一般^{いっぱん}、殆^{ほとん}ど豫^{よさ}想^しし得^うべからざる、慘絶^{さんぜつ}、酷絶^{こくぜつ}の刑法^{けいはふ}を罪滅^{つみほろぼし}のため

に自分で自分の身體に試みるので、腕に穴をあけて
菩提樹の枝に通して梢から倒にぶらさがつて、肉が
切れてガンヂス河へ落ちるのを待つて、鰐のために
食われるやうな伯父さんを本國に持つて居る、印度
人、チヨン某といふのであるから、ものは試だ、と
いふ口上。

丸塚山に犬山道節忠興が假の名、寂寞道人賢柳の
火定あつてより以來、江戸にない見物である。

聞けば群集の見る前で、左の頬から右の頬までづ
ぶりと疊さしの眞鍮針を突刺して見せるさうだ。手
へ小刀を貫くさうだ。踵に五寸釘を打込まして、自
若として居るさうだ。

それさへ前藝だといふものを、本藝はさてどんな
事をするだらう。

と黒山の様な人立で、立錐の餘地もない大人だつ
た。

馭者がものずきで入つて見た。

一人居る脊の高い印度人が、緋羅紗の短服を着て、
上衣つけずの黒のスボンで、天窓に焦茶色の布を巻

ふのである。が、まるで氣拔がしたといふ風で、眼が据わらない。よた／＼しちやあ唯殆ど無意識に、器械的に口をあけて、堅パンを前歯でくはへて、右の手で折ツペしよツて、奥歯で噛碎いて吐出しちやあ、舞臺に踏つけて、あとで齒を鳴すので、馭者は、阿呀といった。

権である。権の野郎だ。

が、もうあゝなつちやあ、痛い事も、苦しい事も、熱いことも、知らないであらう。分らないのであらう。

けれども頬ぺたへ穴をあけようとしたから、見て居るに忍びない。後は後のこととして、馭者は激昂して、群集を突のけて猪のやうに飛び出した。

木戸を出ようとして、フと見ると驚いた。権は堅パンを噛んぢやあ吐き出してるのに、木戸に坐つた、肥満した絹布ぐるみの勧進元が、ちやうど支度をして居たが、大人大人氣の祝であらう、辨當が、何だ、お煮染に赤飯なんだ、煮染に赤飯だった。

【完】